

保護者と共に子どもを育むサンパウロ日本人学校

前サンパウロ日本人学校 教頭

栃木県教育委員会事務局芳賀教育事務所 副主幹 小林 利之

キーワード：チーム、PTA、学校支援ボランティア、おやし学校応援隊

1. はじめに

私は、平成7年~10年に、在マレーシア日本国大使館付属クアラルンプール日本人学校に教諭として派遣していただいた。その3年間の経験の中で、在外教育施設が抱える諸問題に直面すると共に、教職員同士の人間関係や保護者との関係などは継続的な問題であることを感じた。

その後、栃木県国際理解研究会における在外経験者との交流や各種研修会を通して、上記の課題が今なお在外教育施設の問題であることを再認識した。

平成24年~27年3月まで、サンパウロ日本人学校に教頭として再度派遣していただいた。15年以上前に感じた在外教育施設の課題は、まさにサンパウロ日本人学校でも直面している問題であった。管理職としてそれらを解決すべく、講じた策について、以降紹介させていただくが、全ての学校等に通じる方策とは限らず、ある1つの解決策であることを念頭に置いた上で、ご一読いただけると幸甚である。

2. 多くの在外教育施設が抱える課題

(1) 価値観や経験が大きく異なる教職員集団

日本全国各都道府県から派遣される教職員は、各地域の教育方針や教育観が異なることから、個々の価値観もそれぞれ異なる。また、教育環境の違いから、個々の経験も大きく異なる。その「ちがひ」自体は、学校現場にとって全く問題はなく、それどころか、それらの「ちがひ」は、学校教育において大きな可能性を秘めていると捉えることもできる。

しかし、時にそれらの「ちがひ」は、校長の学校経営方針を推進する上で、諸刃の剣ともなり得る。互いの「ちがひ」が認められずに、教職員集団のチーム力が乱れたり、場合によっては指示系統がうまく機能しないといった形となって現れる場合がある。

これらは、多くの在外教育施設が抱える共通の課題であるが、限られた派遣期間であること、教育委員会が存在しないことなどから、解決の糸口が見つかりにくい。

(2) 教育に高い関心を持つ保護者と学校との関係

海外で子育てをし、その間、義務教育を受ける子どものいる保護者にとって、子どもの教育は、時として、生活環境の中で最も重要な要素である。それだけに、保護者は在外教育施設における教育に高い関心を持つ。それ自体は、子育てに第一義的責任を持つ保護者であるから望ましいことである。しかし、海外という日本とは違った教育環境の中で、大きな不安を抱えるだけに、在外教育施設に対して大きな期待を寄せる保護者は、学校教育に対して共感することもあれば、違和感を覚えることも多々ある。それゆえに、学校および教職員との信頼関係が築けず、担任等が保護者対応に困惑してしまうという課題がある。

そして、何よりも学校と保護者との信頼関係が築かれないことは、その学校で学ぶ児童生徒にとって好ましくない影響を及ぼすものである。

3. 課題解決に向けた具体的な実践事例

(1) 価値観や経験が大きく異なる教職員集団を「チーム」にする

①一人ひとりの教職員の存在そのものを認め合う

サンパウロ日本人学校においても、価値観などの違いにより、意見が対立することは多々みられた。それ自体は問題ではなく、その対立が、教職員そのものの人間関係の亀裂に発展することが懸念された。

教職員一人一人の存在そのものを認め合うために、家族を含めた派遣教員の誕生日にメッセージ（寄せ書き）をプレゼントする取組を始めた。教職員自身の誕生日には、放課後にその話題で盛り上がり、食事会などを企画する場面も見られた。また、派遣教職員が家族の誕生日のメッセージをもらうと、涙を流して喜ぶ姿も見られた。

一人一人の教職員が「職場で大切にされている」という自己存在感が、教職員集団を「チーム」へと導いている。

②ワークショップの手法を取り入れた校内研究

校内研修として、全教職員が研究授業を行い、その反省会を実施してきた。一人一人の授業はとても素晴らしく、反省会での意見も非常に建設的であったが、それらはあくまでも個人の研究の域を超えられるものではない。

そこで、同じ目的を持ち、「チーム」として研鑽し合うために、ワークショップ型の授業研究会に取り組んだ。指導案の段階から、全教職員で検討し合い、指導内容はもちろんのこと、指導方法や指導の留意点なども付箋紙を用いて、全教職員で検討した。

全教職員が「チーム」として立案した指導案だけに、授業後の反省会は、課題などを自分自身のものとして捉え、学校全体の指導力向上を目指した研究であることを実感させてくれた。



ワークショップによる授業研究会

③「会話」を重要視した職員室環境

サンパウロ日本人学校は、各教室がコテージのように分散配置されており、学級担任は朝から児童生徒が下校するまで、職員室に戻ることも少なく、それゆえに管理職も含めた教職員同士の会話が極端に少なくなる環境にある。

教職員集団が「チーム」になるには、校務に関わることはもちろんのこと、それ以外のことなども自由に話し合える環境づくりが必要不可欠であると考えた。そのため、特に教室が離れている小学部職員のために、ミーティングルームを設置した。小学部職員は、協議事項がなくとも、毎週月曜日の放課後はミーティングルームに集まり、必要事項を協議したり、情報交換をしたりするようになった。

また、全ての教職員にも、時間の許す限り、空き時間などに職員室に戻って事務処理などをするようお願いしたところ、赴任当初に比べて、教職員が職員室にいる時間が圧倒的に増えた。わずかな時間ではあったが、意図的なコミュニケーションにより、お互いに困っていることを相談したり、アドバイスし合う様子が見られた。さらに、管理職との会話の時間も生まれ、学級経営や教科指導などの課題について話し合い、時には管理職から指導助言する時間にもなった。

教職員といえども、基盤となる人間関係を構築するために、コミュニケーションは最も重要なツールとなる。たとえ雑談であったとしても、それは教職員の間人間関係を構築するために大きく寄与した。

最終的に、全教職員が「チーム」として、子どもたちへの教育に一丸となって取り組んでくれたことは、子どもたちや保護者の様子から十分に感じ取ることができた。

(2) 保護者が学校教育のパートナーとして活動する取り組み

①学校支援ボランティア

前述の通り、海外で義務教育に就学する子を持つ保護者は、子どもの教育への関心が非常に高い。それゆえに、学校の教育方針や担任の指導法などが理解されずに、保護者と学校が対立する可能性を秘めている。その大きな要因は、コミュニケーション不足にあると考える。保護者の願いが学校や教職員に十分に伝わっていない

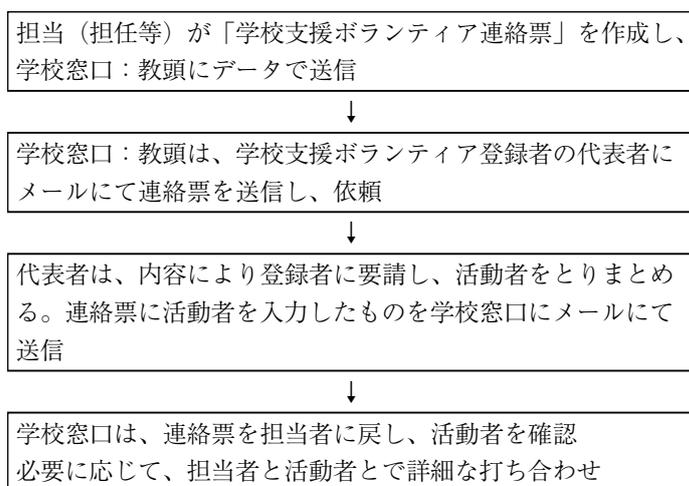
い。または、学校の方針や担任の思いなどが十分に保護者に伝わっていないことが大きな要因と考えられる。

そこで、海外では就労しにくい環境にある母親を中心に、学校支援ボランティアとして協力していただくことにした。

〈学校支援ボランティアの取組から期待されること〉

- *子どもたちの学びが効率的になり、かつ、深まる。
 - *保護者が、普段の自分の子どもの学校での様子を見ることができる。
 - *等身大の学校（教師の忙しい様子、教師の子どもへの関わりなど）を見て、感じてもらうことができる。
- 全保護者に学校支援ボランティアへの登録を依頼したところ、50名程度（約30%）が協力の意思を示してくれた。

〈サンパウロ日本人学校における学校支援ボランティアの流れ〉



活動依頼日時	12月 18日（木） 12:00~14:00 まで
担当教員	
活動内容	清掃指導の補助
活動の詳細	清掃指導の補助 児童・生徒の中には、ほうきの使い方や雑巾の使い方などが上手に出来ない子がいるので、指導をお願いしたい。また、清掃区域が広範囲のため大人の目が届かない。
活動者	
連絡担当者	
交通手段	図書館バス、下町バス、モリスタクシー
質問・要望	
活動内容	各学年教室まわり、家庭科室 学年ごとの教室まわりのレポート、家庭科室の清掃を行う。子どもと一緒に楽しみながら活動ができた。自分が子供の頃の掃除の経験や備忘録の時に読んでいた本を思い出しながら作業ができた。今日は天気も良いと評判だったので参加できてよかった。
感想等	記入者名()
担当教員より	
管理職より	

上記のような極力、単純な流れで実施できるようにしたため、担任等が気軽に学校支援ボランティアの要請ができるようになった。

〈主な学校支援ボランティアの活動〉

- * プール活動における子どもへの指導および監視
- * 小中学生への書写指導（書き初め会を含む）
- * 図書室の整理および読み聞かせ
- * 算数ボランティア（小2におけるかけ算九九など）
- * 清掃指導（特に学期末の大掃除など）
- * 家庭科における補助指導（ミシン、調理実習など）
- * 学習発表会の背景・道具作成
- * 音楽指導（合唱コンクールのパート練習補助）



校内書初め会の指導をするボランティア

〈学校支援ボランティア活動に参加した保護者の声〉

・書写の指導をしましたが、回を重ねる毎に子どもの字がきれいになっていくことがわかり、とてもうれしかったです。先生一人で指導するには限界があると感じました。
・学習発表会の背景（くじらぐも）を作りました。発表会で、自分たちの作ったくじらぐもの前で劇をすることもたちを見ることができて、自分も参加しているようでうれしかったです。
・最初は恥ずかしかったのですが、思い切って水着になって水泳の指導をしました。25mを初めて泳いだ子と抱き合って喜びました。我が子はもちろんですが、他の子が上手になることを喜んでいる自分が不思議でした。
・ボランティアとして頻繁に学校に来るようになり、家ではしっかりしていると思っていた我が子が、学校では意外に手がかかっていることを知りました。先生に申し訳なく思いました。

②おやじ学校応援隊（サ日校おやじ学校応援隊）

駐在員として日々多忙な業務をこなす父親ではあるが、子育てへの参加意識が非常に高く、年3回土曜日に実施する授業参観には、ほとんどの父親が参加してくれた。そんな中、ある父親が「広い敷地の学校を管理するのは大変でしょうから、お手伝いできることがあったらやりますよ」と声をかけて下さった。それをきっかけに、「サ日校おやじ学校応援隊」を立ち上げた。

全保護者に文書で呼びかけをし、おやじ学校応援隊専用のメールに参加の意思表示をしてもらった。登録者は40名を超えたが、実際の活動に参加できる父親は15名程度であった。年4回、中学部の模擬テストや英語検定試験にあわせて実施した。掲示板の清掃とペンキ塗り、体育館床のクリーニング、体育館壁のペンキ塗り、教室壁のペンキ塗りなど、スタッフでは手の届かない箇所の環境整備を行ってもらった。

毎回の活動終了後は、居住区に戻り冷たいビールで懇親を深めた。3年目には、父親の代表である「おやじ学校応援隊長」が主体となって活動するようになった。

4. 成果と課題

(1) 成果

- ① 在外教育施設の赴任は2年～4年という限られた期間である。その地を離れるとき、「もっとこの学校で仕事をしたかった」「もっとこの子どもたちと一緒にいたかった」「もっとこの仲間達と一緒に教育を語りたかった」という思いを持って帰国してほしいと願う。

帰国が決まった教員が学校を離れる「離任式」。小中学生を問わず、ほとんどの子どもたちが、号泣していた。無論、教職員も互いに涙を流して別れを惜しんだ。それは、単に仲間と離れる寂しさだけでなく、共に「チーム」として切磋琢磨したからこそその涙であったと確信する。

- ② 上記の保護者の声にもあるように、学校支援ボランティアは、子どもへの教育効果が高まることはもちろんのこと、保護者と学校が子どもを教育するための「パートナー」となり得る。在外教育施設における社会教育的活動は、在外教育施設が、単なる子どものための学校にとどまらず、大人も子どもと共に学ぶ教育施設となり得ることを立証することができた。

(2) 課題

在外教育施設には、まだまだ課題が山積している。それらの課題を克服できるのは、そこで働く人以外にない。様々な苦難を乗り越えて派遣された教職員は、在外教育施設が抱える課題を克服する義務があり、それと比例して、仲間と力を合わせて、有意義な教育経験をする権利を有すると考える。